［ 別 紙 ２ ］

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

市川　薫

申請者氏名

里地ランドスケープは林野、田畑、集落、水辺などが一体となって形成されていた農村空間である。また、異なる自然条件と人間との長期的な係わりにより地域によって異なる特性を有していたと考えられる。近年、ランドスケープの保全において “地域らしさ”の重要性が指摘されている。本研究は、このような視点から、ランドスケープの変遷が特に著しい都市近郊地域を対象に、地域特性を考慮した里地ランドスケープの保全のための知見を得ることを目的としたものである。具体的には東京圏を対象とし、2 つの空間スケールにおいて、その構造の地域的差異と変遷を、背景にある自然条件と社会経済条件、および変遷を含めて理解し、その上で各主体の林地に対する認識の把握を行った。

まず、東京圏全体を対象に郡を単位として、里地ランドスケープ構造の地域的差異とその変遷について、統計書等から把握した土地利用と植生データを用いて解析をおこなった。その結果、1910 年には、土地利用は概ね地形条件に対応していたが、台地においては地域的な違いが見られた。林地は主として広葉樹とマツで構成されていたが、その比率には地域間で偏りみられ、その一つの要因として、特定樹種の薪炭を必要とする産業の影響が示唆された。1960 年以降は、特に東京中心部から 50 ｋｍ圏内に位置する郡で都市化が著しく、2000 年には都市的土地利用が 25 ％以上に達した。林地植生は、スギ・ヒノキの大幅な増加とマツが激減した結果、地域的差異は大きく低下した。以上から、東京圏の里地ランドスケープは従来、地形条件とともに、社会経済条件も反映した地域特性を持っていたが、近年の都市化と植生変化によって急速に均質化が進行していることが明らかになった。

次に、1910 年において異なる里地ランドスケープの特徴を持ち、その喪失が懸念される 50 ｋｍ圏内の地域から、3 地域（相模原市旧大野村、町田市旧鶴川村、千葉市旧千城村）を選択し、より詳細なランドスケープ構造と変化を把握するために、旧版地形図および空中写真を用いて明治期以降の 6 時期の土地利用図と、一部区域について戦後の 3 時期の植生図を作成し、ＧＩＳによる解析を行った。

明治－大正期の里地ランドスケープは、3 つの地域とも林地と農地が卓越していたが、土地利用と地形の関係の程度が地域によって異なり、大野村において社会経済条件の影響がみられた。また、3 つの地域で畑地と林地を相互に転換する、切替畑という土地利用形態が存在したが、その規模や空間分布は地域間で差があり、住民の社会的背景の違いが影響を及ぼしていたと考えられた。その後の土地利用変化は、都市的土地利用の増加が主だったが、その開始が大野村では戦前であり、鶴川村と千城村では 1960 年以降であったこと、結果として残存している林地には、大野村と鶴川村では保全地域が存在し、千城村では用材生産のた

めの利用がされているなど、都市化時期や形態、それに応じた残存林地の規模や、位置づけが異なっていた。

次に、各事例地域において植生の把握を行った区域の近傍に位置する旧集落の住民、新規住宅地の住民、林地で管理作業を行っているボランティア団体のメンバーを対象に、当該区林地の認識等に関するアンケート調査を行った。植生判読結果との比較により、過去の植生に関する知識については、知識の伝達者としての役割を果たしうる旧集落住民でも十分ではないこと、管理主体であるボランティア団体メンバーは、知識が伝達されていないか、伝達の過程で偏りが生じている可能性があること、新規住宅地住民は、知識が少なく管理についての意識も低いこと等が示唆された。

このように、本研究では、里地ランドスケープ地域的差異を、２つのスケールで空間明示的かつ、社会経済条件とあわせて考察した結果、地域的差異が喪失しつつあることが明らかになった。また、保全主体の地域的差異に関する認識が比較的早い時期から喪失していることが明らかになり、長期的変遷を含めた地域的差異の地図化は、このような認識を支援する情報化手法として有用であると考えられた。今後は、地域的差異とその変遷が地域社会や生態系に与えた具体的影響の把握、長期的変遷をふまえた地域の特性の保全主体による認識、“地域らしさ”を活用した保全計画のフレーム構築が必要と考えられる。

以上要するに本研究は、都市近郊における里地ランドスケープの地域的差異の物理的・認識的な喪失の実態と、地域特性の認識を支援する手法の有効性を示した研究として、評価できる。よって審査委員一同は、本論文が博士(農学)の学位論文として価値あるものと認めた。